ま　え　が　き

学校長　太　田　雅　夫

高等学校の新学習指導要領は平成６年度から実施される。また、大学入学試験制度にも年々変更がみられ、多くの大学の二次試験に課せられる試験科目や実施方法等において変更が繰り返されている。学習指導要領の改訂によって、本校のカリキュラムにも改訂の必要性が生じたし、大学入学試験制度の変更もまた本校の教育に大きな影響を及ぼしている。さらに、「金沢大学教育学部附属学校移転構想に関する調査研究」（報告書）が文教施設協会によって作成され、既に文部省にも提出された由である。本校は、今後、これらの諸情勢に対処するため、幾多の研究を必要とするであろう。

ここに掲載された論文は都合４篇であるが、何れも力作ばかりである。社会科と英語科の論文は教科教育に関するものといえるが、国語科のものは、教科に関する専門研究といえよう。

山本教官は、本校の新教育課程における二年生の日本史Ａに関する試行実践を概説し、その反省と新教育課程実施に向けて留意点を述べている。地域史を教材とした「石川県域の歴史」を取り上げ、通常のような講義形式をとらないことや原則的には定期試験による評価はしない等を原則として実施した。具体的には調査の発表や資料に基づく討論など生徒自身の能動的な学習活動を行なわせ、評価は論文かレポートの形で各自の意見をまとめさせた。「石川県の現状と将来展望」というテーマについての生徒の取り組みをみると、種々の問題について、主体的にしかも地域の視点から考えたこと等がうかがえたという。

岩城谷教官は、本校に入学する生徒に対して行う英語教育の策定と展開に関して、英語学習の指導計画、英語学習の仕方、補講等について説明しながら、現在の英語教育は大学受験に対応して策定されたものであり、その展開において速度ある進捗が計られている。この従来からの指導に対する生徒側の反応の具体的な資料を得るため、アンケート調査を実施し、その結果を通して指導の特色を明らかにした。次いで、その策定と展開に基づいた指導による生徒側の実際の生の結果としての成績分布と成績の動態を詳しく分析し、英語教育の策定と展開にどのような問題点があるのかについて、本校の英語教官の意見を加えながら検討している。

西野教官は、本校における外国人講師の授業について、これまでの経過を辿りながら、授業の実践例を挙げ、経験から得たところを論述している。昭和48年から交換留学生を受け入れてきたが、彼等をアシスタントとして実施した研究授業における研究計画やその効果、昭和62年度から本校独自に外国人講師を導入した経験、授業時数及び授業形態、導入が短期間で中止となった原因、平成２年から文部省の英語担当講師を導入、ティームティーチング方式での授業を英語Ⅰ、Ⅱ（リーダー）にした理由、具体的な授業の計画と授業例、生徒の感想、今後の取り組みに際して期待されるところ等を述べている。

奥村教官は、『和漢朗詠集』の特色を主として構成の面から明らかにしようとし、作品の選択・組み合わせ・配列を手がかりに『千載桂句』との相違を考察している。中国の類書の構成を継承しているとされる『千載桂句』との比較において、日本のアンソロジーの独自性を見い出している。また、両者に共通する桂句で、それぞれ部類された項目が異なるもののうち、季節までも異なるものとして、蛍に着目し、中国と日本とにおいて蛍という季節の景物の捉え方の違いを見い出し、中国的な「秋の蛍」を日本的な枠組みの中で「夏の蛍」としているところ等に『和漢朗詠集』の独自の性格を認めている。

読者の皆さんの忌憚のないご意見・ご指導を賜われば幸いである。